

駄菓子屋と子供の変化の一考察

これからの地域コミュニケーションへの提言

部	3年1組22番	柴原 正幸	他4名
部	3年2組1番	朝日 諒介	
部	3年3組35番	谷地 晃佳	
部	3年12組16番	土居 望	
部	3年14組20番	松橋 真美	

【目次】

はじめに

第一章 駄菓子屋の歴史と空間

第一節 駄菓子屋の誕生

第二節 駄菓子屋の空間

第二章 駄菓子屋の衰退

第一節 子供たちを取り巻く社会変化

第二節 少子化

第三節 時間の減少

第四節 視野の減少

第三章 社会変化と駄菓子屋

第一節 社会環境の変化

第二節 戦前の駄菓子屋

第三節 高度経済成長

第四節 道の変化

第五節 まとめ

第四章 実証的研究

第一節 研究目的

第二節 調査概要

第三節 分析方法と分析結果

第四節 考察

第五章 駄菓子屋とコンビニの比較

第六章 考察

要旨

昔の子供たちは強い地域とのコミュニティーでつながれていた。そのコミュニティーに欠かせない存在の一つとして駄菓子屋があった。駄菓子屋の中には子供たちによる小さな社会が存在し、そこで人との触れ合いから様々な事を学び成長し、それを見守り、時には叱ってくれる「おばさん」という存在があった。しかし現在、子供を取り巻く社会や環境は変化し、そのような変化の中で駄菓子屋という存在は消えつつある。

そこで私達は、現代の子供達が欠乏していると思われる地域社会との繋がりや希薄化しているであろう人間関係を、「駄菓子屋」というフィルターを通して、問題点と解決策を模索する。

まず第一章で、駄菓子屋の歴史を見ていく事で、駄菓子屋という空間に、子供がどのような魅力を求めていたのかを探る。そして第二章で、駄菓子屋の衰退の原因を社会変化から述べ、さらに第三章でその社会変化について深く考察していく。第四章では、街頭での有意抽出法によるアンケート調査を行い、その結果から、社会変化の一つである、地域コミュニケーションの減少が子供に変化を与えたことを実証する。第五章では、駄菓子屋が町に当たり前にあった時代と現在とを比較することで子供の変化とその原因を探る。最後に、駄菓子屋の良さを現在に生かすための方法を模索する。

はじめに

今年、2004年6月1日（火）、長崎県佐世保市立大久保小学校で、同小学校6年の女子児童が11歳の同級生の女兒にカッターナイフで首を切りつけられ死亡した⁽¹⁾。殺害動機は、態度が生意気だからというものであった。2人は親友であったが、2人でチャットを行っている際、女兒はインターネット上に女子児童から嫌な事を書かれたらしく、それが原因で、女子児童を呼び出し殺害したという。

近年、このような少年犯罪のニュースをよく耳にする。警察庁によると、昨年1年間に殺人や強盗などの凶悪犯罪で補導された14歳未満の触法少年⁽²⁾は、前年比47.2%増の212人であった。⁽³⁾

子供達は確実に変化している。キレやすい世代と言われた私達の世代から、すぐにキレる世代へと変化したのだろうか。

このような子供達の変化の原因について考える時、同時に、子供達を取り巻く社会の変化が目まぐるしいことに気づく。かつて子供の遊び場であった原っぱや空き地だった場所には道路や建物が建設され、さらに情報化社会が進んだことにより、会話による言葉のやり取りに代わって、インターネットや携帯電話上での文字でのやり取りが増え、子供達の遊び場は、外から内へとシフトしてきた。子供達の変化は社会変化に対応して起こっていると考えられる。

社会変化によって、子供達から失われつつあるもの、その1つとして、地域社会との繋がりがあげられると考える。かつての子供達は外に目を向け、地域の人々との繋がりの中で生きた学びを得ていたことであろう。

そこで、原っぱや空き地が多く残り子供達が外で遊ぶ機会が多かった頃、人々は今よりもっと強い地域コミュニティーで結ばれていたのではないかという仮説を立てた。そして、現在は姿を消しつつあるが、かつて子供との地域コミュニティーには欠かせなかっただろう駄菓子屋という存在を取り上げ、駄菓子屋という視点から、子供と地域社会との繋がりを考える。

なお本稿は、「うまい棒」などの駄菓子を手がける、株式会社やおきんの酒

井勝一氏へのインタビュー（２００４年７月９日１４時３０分から１６時３０分）、また、東京都羽村市で駄菓子屋を営む佐々木ミヤコさんへのインタビュー（２００４年９月１４日１３時３０分から１５時３０分）などに依拠しつつ、今後の地域コミュニティへの考察を進めていく。

第１章 駄菓子屋の空間

現在、町中で駄菓子屋を見かける機会が減少してきた。だが、かつて駄菓子屋は子供達の小さな社会の中で重要な存在の１つであり、その中から子供達は地域の人々との関わりを広げ、繋がりを強くしたと考えられる。そこで本章では、子供社会の中で子供達と密接に結びつき、地域との関わりを広げるための架け橋であっただろう駄菓子屋が、どのような魅力を持った空間を子供達に与えていたのかを考察する。

では、駄菓子屋とは、子供達にとってどのような空間だったのだろうか。

東京都羽村市で、４０年前から現在まで駄菓子屋「みずほ防災」を運営してきた佐々木ミヤ子さんは、長く子供達と関わりを持ってきた。佐々木さんは次のように述べている。「昔、子供達は、家にランドセルを置いた後みんなこの店に集合して、お菓子を買って外に遊びに行ったり、店の前で遊んでいたたりしたよ。それに、だれだれはあっちに遊びに行ったよ、とか教えたりしてね」。

おそらく、駄菓子屋は子供達の集合場所であり、遊び場であり、情報の発信基地であった。そして、子供達にとって駄菓子屋経営者である「おばさん」は、自分のことをよく知り存在を認めてくれる人であり、駄菓子屋には、その「おばさん」の下で購入する喜び、安心感があった。

子供が、自分達で店を選別し、自分達の店を獲得していったということ。ここでは自分達の意志と志向に従って品物を選別して買うことができたということ。そしてなによりも、そこではたとえ何歳の子供であろうと、子供扱いせず、１人の客として扱い接し、見守る「おばさん」がいたということ。これが、子

供にとっての駄菓子屋の空間であったといえる。

このような魅力的な空間を持つ駄菓子屋は、子供達にとって貴重な存在であったと考えられるが、では、このような駄菓子屋が減少した背景は何なのだろうか。その背景を、第2章で探るとともに、それらが子供達に与えた影響について考察する。

第2章 駄菓子屋衰退の背景にある社会変化と子供への影響

第1節 繁栄期から衰退へ

戦前、産業構造が第1次産業中心であった時代には、多世代同居、いわゆる大家族が社会の基礎的単位であった⁽⁴⁾。そこでは、母親も農作業などの生産労働に従事し、祖父母や兄弟姉妹など家族全体、さらには、地域社会の支援を得、母親は子育てを担っていた。それゆえ、子供達も当然の如く、村から出ることなく暮らして遊び、そして、子供の世話をしながら近所で遊ぶ子供達の遊び場の1つであった駄菓子屋は、自然と繁栄することとなった。

駄菓子屋の歴史を振り返る時、1950年を駄菓子屋の黄金時代と位置づけることが今日では常識とされている⁽⁵⁾。事実、現在まで営業している店で、この年代に駄菓子屋を始めたという店は多い⁽⁶⁾。

その駄菓子屋が衰退を迎えるきっかけとなったのが、高度経済成長期⁽⁷⁾であると考えられる。そこで、駄菓子屋が衰退していった高度経済成長期の時代から現在までの変化が子供達にどのような影響を与えたのかを、子供の生活圏のほぼすべてである家、学校、地域社会という視点より考察する。

第2節 家

高度経済成長期、産業構造が第1次産業から、第2・3次産業へと展開する

過程で、男性はサラリーマンとして外で所得を得て、女性は家庭の中であって家事・育児に専念するという性別役割分担が確立していった⁽⁸⁾。企業社会の担い手としての勤労者が「内助の功」を必要としたためである。その結果、専業主婦数が増加し、その数は1970年代中期に最高となった⁽⁹⁾。これは、子供の面倒を自ら見ることができる母親が増加したことを意味する。今まで、家族や地域の支援を得て子育てしてきた女性は、自ら子育てに専念するようになり、子供が子供の面倒を見ながら遊ぶという光景は減少した。

しかし、現在、専業主婦の数は減少傾向にある。その原因として、女性の高学歴化があげられる。女性の高学歴化が進み、男女間の給与所得の格差が小さくなったことにより、女性が職場を離れることが生活水準の低下に繋がるようになった。そして、晩婚化・未婚化が進み、初産年齢がそれに伴い上昇し少子化が進むこととなった⁽¹⁰⁾。少子化は、主に駄菓子屋を消費している子供の数の減少を意味する。購買力の低い子供をターゲットとし、しかも1つ1つの商品単価が安い駄菓子屋にとって、ターゲット層の減少は致命的である。社会の変化に伴い駄菓子屋が衰退することは必然といえる。

こうした少子化の影響を受け、親からの一人の子供に対する期待が高まり、子育てに対して不安や悩みを持つ母親が増えることとなる⁽¹¹⁾。そして、このことは、本章第3・4節で述べる高学歴社会、地域社会の繋がりの減少といったことと相互に影響し合っている。

第3節 学校

次に、学校の変化についてみる。ここでの最も大きな変化は、1992年からの週休2日制の導入である⁽¹²⁾。

これにより、土曜日が休日になったことで、足りなくなった授業時間を他の曜日に振り分けなければならなくなった。つまり、1日当たりの授業時間数が増加したのである。それは、さらなる放課後の時間の減少を意味する。子供達が駄菓子屋に集まるのは、主に放課後である。しかし、授業時間数が増えたこ

とで、塾や夕飯の時間が迫ってしまいすぐに帰らなければならない子供が増えたのである。

塾という新たな放課後の過ごし方が一般化した背景には、高学歴社会がある。有名な高校や大学の卒業証書が、より高い地位に着くための未来の身分保証書となるため、子供達は受験という戦争に向けて塾や習い事へ通い始めるようになった⁽¹³⁾。

こうして子供達が駄菓子屋に集まる放課後という時間は減少してしまった。このことは、すなわち子供の放課後の自由な時間の減少を意味している。

第4節 地域

最後に、道の変化・郊外化による地域社会の繋がりの変化に注目する。

まず、道の変化からみていく。高度経済成長に伴い、モータリゼーション⁽¹⁴⁾が進み、その普及の度合いは、日本では1965年の約10パーセント（世帯普及率）から、10年後の1975年には約50パーセントになるという急激なものであった⁽¹⁵⁾。

かつての子供達の遊び場であった舗装されていない道は、車が通る道路へと変わり、年ごとに自動車の交通量が増えた。そしてまた、道路沿いの開拓によって、ファミリーレストランやマンション・駐車場・コンビニなどが次々とでき、道の周囲の風景は急速に変化していった。これらの変化は、子供達の遊び場を奪い、子供達にとって、町での多様な人々とのふれあい、自然の中での豊かな体験のいずれかの機会も得にくい地域にしていった。

次に、郊外化について考える。高度経済成長期に、雇用者として単身で都市に流入し、結婚し、核家族を形成した若年者の住宅需要に対応するため、1950年代後半以降には、郊外が建設された。郊外には、画一的な規格住宅が提供され、雇用者、専業主婦である妻および子供達が集まるという、年齢も家族構成も生活様式もきわめて同質な地域が形成された。

このような画一的な地域は、かつての下町のような地域との繋がりが希薄で

あり、子供達が視野を広げ、大人や様々な年齢の友人と交流し、生きた学びを得ることができる場所ではなくなってしまったのではないだろうか。

こうした地域の繋がり希薄化は、家内工業や小規模商店の閉鎖とも結びつき、商売を通じた町内会的な地域社会の維持を困難にした。かつて、下町が持っていた「困った時はお互い様」的感覚による助け合いや、子供達のたまり場、遊び場となる路地や店先、そこで遊ぶ子供達に対するそれとない目配りなど、地域社会が持っていた、住民の自発性に基づく非制度的な形でさまざまな子育て支援機能が低下し、子供数の減少による遊び友達の減少などとともに、子育てが地域から切り離され、家庭と学校だけで行われるものとなっていった。

第5節 子供の現状を考える

以上のように、本章第2節から第4節では子供の主な生活圏である家・学校・地域社会に注目し、社会変化が及ぼした子供達への影響を見てきた。そして現在、情報化社会の急速な発展によって、子供達の孤立が進んでいると思われる。なぜなら、情報化社会の更なる発展によって、子供達への携帯電話やインターネットの普及が驚くべきものであり、今や、小中学生の4人に1人は携帯電話を持つ時代であるからである⁽¹⁶⁾。昔の子供は、連絡手段は家の電話くらいしかなかったので頻繁に連絡することなどできなかった。そこで駄菓子屋を待ち合わせ場所に使う子供も多くいた。駄菓子屋に行けば誰かがいるのかもしれないといった感覚を子供達は持っていたのである。そこで思わぬ相手と出会い、その後不特定多数の子供が入り混じって遊んだりしたこともあっただろう。しかし、携帯電話があることによって、駄菓子屋の待ち合わせ場所としての機能を利用しなくとも、特定の誰かとどこでも待ち合わせができるようになった。そうすることで、駄菓子屋での付加価値的な出会いは減少することになる。

また、インターネットの普及により⁽¹⁷⁾、家族や友達など、人との直接的な対話は減り、携帯電話やネット上での文字のやり取りが増えた。子供達の視野は、遊び場であった町全体から携帯電話・テレビ画面の中へと移行し、狭くな

ってきたといえる。

本章でこれまで見てきたように、子供達は様々な変化の影響を大きく受けてきたことがわかる。その結果、家庭内や地域社会が持っていた教育力が低下し、子供たちの考える力、豊かであった人との付き合い、人間関係を希薄なものとしていった。そして、子供の空間、時間が減少し、その結果、視野も狭まることとなったのである。

第 3 章 実証的研究

第 1 節 研究目的

この研究は、各年代別に対して、駄菓子屋の意識調査、また駄菓子屋を通しての地域コミュニケーションの意識調査を行うものである。目的として、現代の子供達は過去に比べ、地域コミュニケーションの欠乏があるということを、街頭でアンケートを行い証明する。

第 2 節 調査概要

このアンケート調査は、有意抽出法⁽¹⁸⁾によって行われるもので、幼稚園生や小学生から、団塊の世代(50代後半)以上の年代まで、各年代別にアンケートを行う。アンケートは子供向けAと大人向けBの2種類を用意した。Aは二十代未満、Bは残りの年代すべてに行った。実施期間は8月25・26日、9月3日・4日、実施時間は午後3時～7時に行った。

第 3 節 分析方法と分析結果

年代別サンプル

20代未満	22人	40代	20人
20代	17人	50代	21人
30代	18人	60代	18人

質問項目

A 対象・・・(20代未満)

- Q 1 駄菓子屋に行ったことがありますか？
- Q 2 友達とどこであそびますか？
- Q 3 何をして遊びますか？
- Q 4 近所の人と話しますか？
- Q 5 親や、先生以外で怒られたことがありますか？
- Q 6 最近泥だらけで遊びましたか？

B 対象・・・(残りの年代全て)

- Q 1 子供の頃、駄菓子屋に行ったことがありますか？
- Q 2 週どのくらい行っていましたか？
- Q 3 どのくらいの年齢の頃行っていましたか？
- Q 4 どこで遊んでいましたか？
- Q 5 駄菓子屋は身近ですか？
- Q 6 自分の子供を駄菓子屋に行かせたいですか？
- Q 7 現代とあなたの時代ではどちらが地域コミュニケーションが多いと思われますか？

上のアンケートの集計結果を、グラフにまとめる。

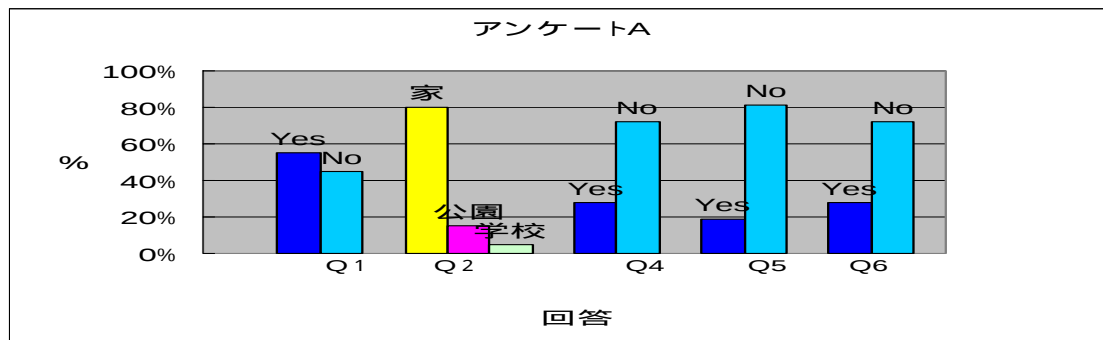


図1・アンケートA 20代未満の回答結果

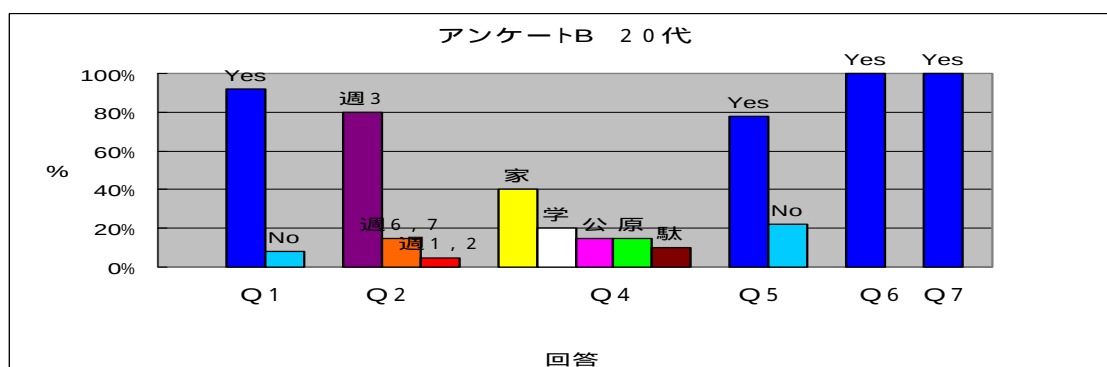


図2・アンケートB 20代の回答結果

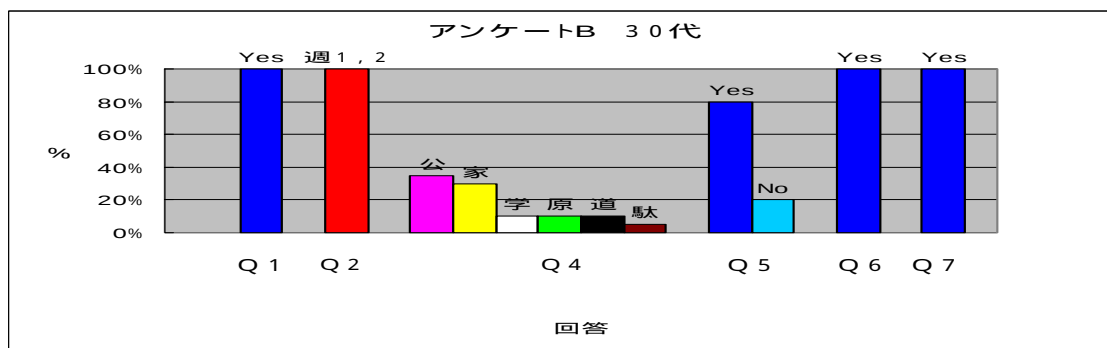


図3・アンケートB 30代の回答結果

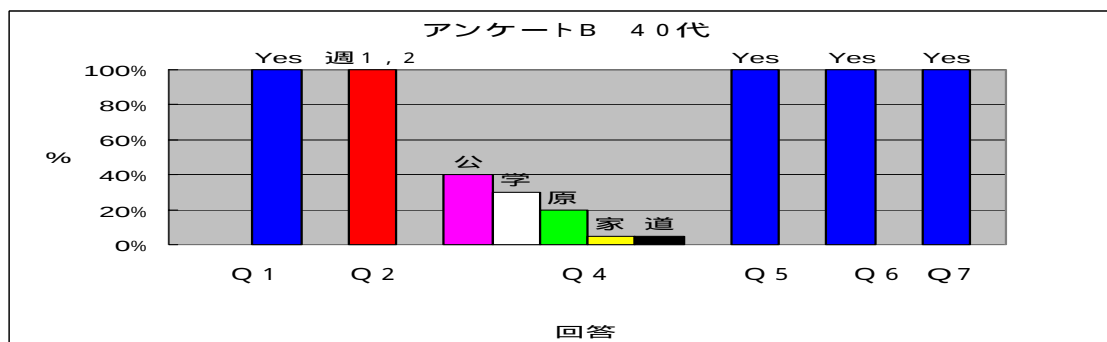


図4・アンケートB 40代の回答結果

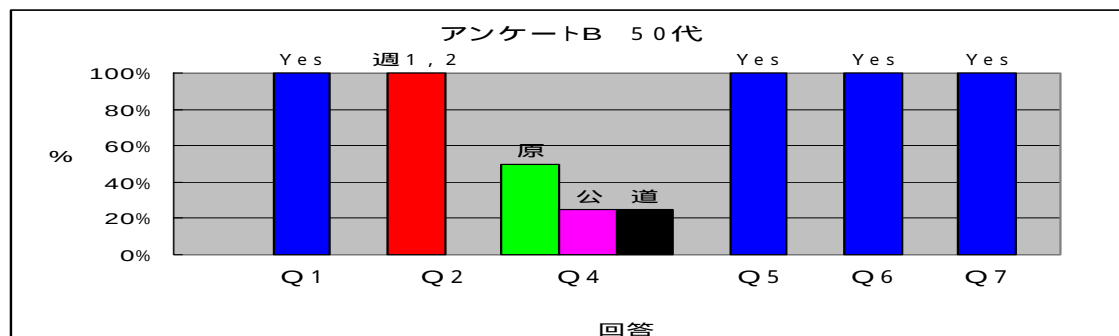


図5・アンケートB 50代の回答結果

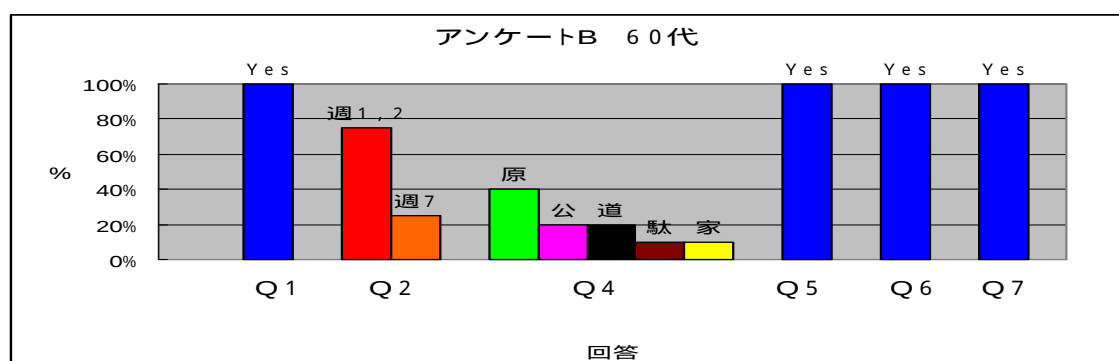


図6・アンケートB 60代の回答結果

第4節 考察

まず20代未満に用いたAのアンケートに注目する。Q1から現在の子供達は55%しか駄菓子屋に行った事が無いことがわかる。NOと答えた方に、『1・家の近くに駄菓子屋はありますか?』『2・駄菓子屋に行ってみたいですか?』と2つの質問を行い、それに対する回答は、1は全員がNO、2は全員がYESと答え、身近に駄菓子屋が存在しないことがわかり、子供達自体は駄菓子屋に対して非常に興味を示していたのが印象的であった。

またQ3、Q4、Q5、Q6の結果をみると、現在の子供は、親や先生以外の大人との関わりが少ないことがわかる。また、遊び方も、80%が家の中でTVゲームをすると答えた。

次に他の各年代に用いたBのアンケートに注目する。Q2では20代は週3回、他の各年代は週1, 2で駄菓子屋に通っていたという回答が一番多く、あまり変遷が見られない。20代と60代では、週6、7回との答えがでている

くらいである。

Q 3 は、6 ～ 12 歳の間に回答が集まり、20 代以上の人にとって、駄菓子屋は小学生の時に身近な存在の 1 つであったといえる。通っていた頻度、年齢はどの年代も同じである。

Q 4 の回答から、昔に戻るほど、原っぱや公園、道路の比重が多くなっているのが分かる。先に述べた 20 代未満や 20 代は家が一番の比重があることから、やはり現在の子供は外より内で遊ぶ傾向がみてとれる。それ以上の年代は外での遊びが大半を占めた。20 代は意見が上の年代と下の年代の意見と比べ、両方の性質がみてとれたことから、社会変化の影響が出てきた世代であるといえる。また、原っぱや公園、道路など外で活発に遊んでいた 50 代以上と、今の子供との遊び方は正反対である。外で遊ぶことで、その他の地域の子供や大人と常にふれあっていたとの答えも少なくなかった。

Q 5、Q 6 は各年代ともほとんど 100% YES と答えていることから、駄菓子屋に対するニーズは普遍的で、駄菓子屋に対する思いも変わらないことがわかる。

Q 7 の回答や、先述の Q 4 の回答から、地域コミュニケーションは、昔の方が多かったといえる。

また 50 代以上の方々は、駄菓子屋は思い出、夢を売る場所、と懐かしがりながら語ってくれた。よく駄菓子屋のおばさんに怒られたとも話してあった。当時は現在と違い、地域の大人とのふれあいが、たくさんあったという。駄菓子屋で買い物をして、原っぱに遊びに行くのは、欠かせない日課だといわれた。

上にあげた回答の集計結果、私達が思っていた以上に現在の子供達は、地域コミュニケーションが昔に比べ圧倒的に欠乏していたと実証できる。

第4章 「駄菓子屋時代」と「コンビニ時代」の比較

第1節 比較の目的

昔ながらの駄菓子屋が消滅しつつある現在、駄菓子屋に代わる存在の1つとしてコンビニがあげられる⁽¹⁹⁾。そこで、この2つを人間関係が希薄ではなかった時代と希薄である現在、各時代の象徴的存在として位置づけた。その上で、駄菓子屋がどの町にもあり、またそれが当たり前だった頃（高度経済成長期以前まで）を「駄菓子屋時代」、その駄菓子屋に代わる存在のコンビニがどこにもあるのが当たり前である時代（高度経済成長期から現在）を「コンビニ時代」とする。駄菓子屋、コンビニを中心に、この両時代を比較することで現在の人間関係の希薄化につながったと思われる変化を見つけ出し、その変化の原因と結果を考察する。

現在の子供達に影響を及ぼしたと思われる変化は、大きく分けて「空間の変化」、「時間の変化」がある。

第二節 空間の変化

まず、「空間の変化」であるが、店の「外の変化」と「内の変化」とに分けられる。

第1項 外の変化

店の「外の変化」としてあげられるのが「道の変化」である。第2章で述べたように、この変化はモータリゼーションによって起こった。それにより道は「人の道」から「車の道」へと変化したのである。「駄菓子屋時代」、子供達にとって道は遊び場であり、教育の場であった。遊び場としては、駄菓子屋で買ったものを店先の道で使って遊んだりして使った。これは、公共のもの（ここでは道）と私的なもの（ここでは駄菓子屋）との境があいまいだったからこそ

可能だったと言える。店の前の道も、店の広がりとして存在していたのである。駄菓子屋時代は「公共的な社会」であったといえる⁽²⁰⁾。また教育の場としては、道沿いの店々を見て、地域の大人の生きる姿を見ることで、学校の義務教育による知識を得るための学習ではなく、行動や実践するために生涯にわたって必要となるであろう、人との関わりにおける交流能力、コミュニケーション能力を育み、そして、共に活動する過程を通して、子供達の豊かな心、自ら考え学ぶ力を育む場として使ったのである。これを私たちは「生きた学び」と定義づけることとする⁽²¹⁾。

それに比べ、「コンビニ時代」の道は、車が通るためだけのものであり、コンビニにはコンビニ。その前の、道は道。と「公私の境界」は明確である。「コンビニ時代」は「利己的な社会」であるといえる⁽²²⁾。

モータリゼーションが進むにつれて、家は道路に向かって閉じて、道（公共空間）に住民の目が届かなくなり、道を通した人々との付き合いや物売りの文化も消えた。日常生活から学び・遊び・人付き合いが無くなり、それらはそれぞれ、学校・公園・公民館といった無味乾燥な場所に閉じ込められてしまったのである。

第2項 内の変化

店の「内の変化」としてあげられるのが店員（店主）の変化である。

地域で子供を見る場合、「親と子」や「教師と生徒」のように直接的な緊張関係を持たずに、逆にそのような緊張を緩めてくれる「おじさん・おばさん」や「おじいさん・おばあさん」といった「社会的オジ・オバ」の存在が重要視されている⁽²³⁾。駄菓子屋には常にそこに居る「おばさん」が居た。「おばさん」は、子供世界と大人世界を結ぶ媒介者の役割を果たし、地域の中で子供達を見守る目になっていた。それに比べ、コンビニにはマニュアル化されたアルバイト店員しかおらず、行くたびに店員は違っていたりする。他者との関わり合いの減少は明らかである。

第 3 節 時間の变化

次に「時間の变化」である。子供達は遊び空間以上に遊び時間が無いことに不満を抱いている。子供の遊び時間が無くなるという変化は高度経済成長期に起き、その結果、放課後の自由な時間が減少したことは、前述のとおりである。その結果、子供達は「今」という時間を生きることができなくなったのである。

こうして、子供達は現実世界に遊びの空間も時間も失った。そして、その代わりにテレビやゲーム、インターネットなどの仮想世界を遊び場とするようになったのである⁽²⁴⁾。

第 4 節 考察

「駄菓子屋時代」の子供は、空間も時間も自由に使うことができたため、町中が自分のフィールドであり、また情報源であった。こうした子供達にとって、自分達の目線で見える世界は、広いものであった。それに比べ、「コンビニ時代」の子供の触れる世界は、空間も時間も少なく、携帯電話やテレビ画面の中が中心となり、実際のコミュニケーションのないまま、狭い視野で社会を見ることとなる。

こうした「コンビニ時代」の子供達が形成する人間関係は、直接のタテの関係である父母または学校の先生、ヨコの関係である兄弟、友達といった、二方向への繋がりがほとんどである。また、その関係は、子供の生活のほぼ全てを占める家と学校で形成されるものである⁽²⁵⁾。

このような人間関係が形成されてきた背景には、大人と子供の付き合い方の変容と解体があると思われる。高度経済成長期、大人と子供の関係は共に同じ方向を向いて生活している共生関係であった。それがだんだんと大人と子供が向き合う教育関係となり、子供は大人から教育や保護、そして指導を向ける対象として見なされるようになった。こうした大人側の子供に対する意識変化を子供は受け止め、現在のような大人との人間関係、つまり、教育や指導、保護

を行う父母または先生といった大人のみとのタテの関係を築くこととなったのではないだろうか。

また、ヨコの関係についても、大人の変化の影響があると思われる。子供の近隣地域との繋がり、居住歴などに関係するため、親の近隣地域との繋がり大きく関係する。核家族化が進み、家々が独立する中、親の地域との繋がり薄れ、それと並行して子供も友達となる資源の減少など、ヨコの関係を形成し難くなってきているのだ⁽²⁶⁾。

「コンビニ時代」の子供が、狭い視野と狭い人間関係から脱却し、広い視野で豊かな人間関係を築いて成長するには、人との関わり方を学ぶ必要性がある。また、学問の学びだけでなく、「生の体験」から学ぶ「生きた（社会的）学び」が、子供が社会と結びついて生きていくために、重要なのではないだろうか。

第5章 考察

では、子供が社会と結びつくにはどうしたらいいのだろうか。私達は、これを解決する1つの案として、松岡(2002)が提案する『ナナメの人間関係』による、新たな人間関係の形成をあげる。『ナナメの人間関係』とは、子供と大人のタテでもヨコでもない人間関係を意味し、この大人は、子供に対して、タテ関係の教育とはまた違った「育む」とでもいうべき教育を行う。こうした教育は、大人 対 子供として行われるのではなく、社会の中の人 対 人として行われるものといえる⁽²⁷⁾。そして、この人間関係こそが、「コンビニ時代」の子供にとって、社会の中で人との関わりを学ぶために必要なのではないだろうか。

この人間関係を築く場として、駄菓子屋があげられる。家と学校が主な生活空間という「コンビニ時代」の子供には、「居場所」が少ない⁽²⁸⁾。そうした中で、駄菓子屋は、家と学校の間にある数少ない「居場所」であり、そういった意味で異空間である駄菓子屋で、子供は、大事な客という社会の一員として

扱われ、買い物をする喜びを知り、「おばさん」と会話をすることで、「おばさん」と『ナナメの人間関係』を築くことができるのである。これは、駄菓子屋だけでなく、自転車屋などにも同じことが言える。自転車は子供にとって身近で重要なものである。自転車がパンクしたとき、自ら自転車屋に行き、おじさんに修理してもらう。おじさんは子供の目の前で鮮やかな技術をみせる。そして、子供はおじさんと会話を交わしたりするであろう。こうした中で、子供は社会での人との関わり方を学んでいく。

しかし、現状を見てみると、時間も空間も、大人の、特に親の思うように使われるようになっているため、子供たちが自分で考え、行動することが非常に困難になっている⁽²⁹⁾。

こうした中で、子供たちが『ナナメの人間関係』を築くことができるようにするためには、人とのふれあいに対して、子供の興味関心を引き出していくように大人が働きかけを行うことが必要である。しかし、一番身近な存在の大人である、親や先生は、すでに教育者という立場が確立されてしまっているため、新たな展開の期待はしにくい⁽³⁰⁾。

ここで注目したいのが、高齢者である。これから高齢者は増加の一途をたどり「高齢者の世紀」となるであろう21世紀。また、シニアライフの変化により今後、仕事が定年になり、時間も体力も持て余す高齢者も増加することが予測できる⁽³¹⁾。

こうした高齢者と子供の新たな結びつきが『ナナメの人間関係』となりえるのではないだろうか。そこで、地域でそのような高齢者を雇用し、その力を借りて、その地域の「社会的オジ・オバ」になってもらう。そして、「生きた社会的な学び」を伝えてもらうのである。

そこで、『ナナメの人間関係』を築くことのできる空間について考察する。その1つである駄菓子屋という貴重な存在は、本来の経営では、更なる衰退は否めない。フランチャイズチェーンという新たな展開で成功を収めているところもあるが、これは大人世代をもターゲットとしたもので、子供の空間ではなくなるため、『ナナメの人間関係』の形成は見込めない⁽³²⁾。我々が求める『ナ

ナメの人間関係』を形成する場としての駄菓子屋の将来性はないように思われる。

そこで、駄菓子屋が持つ、『ナメの人間関係』を築き、「生きた社会的学び」を行える要素を『駄菓子屋的要素』と呼ぶこととし、子供達が人とのコミュニケーションを学ぶために、この要素を持った空間づくりを提言する。

また、この『駄菓子屋的要素』をもった空間は、子供の意識しだいで、増幅していく可能性を持つ。というのは、駄菓子屋という概念の発生から裏付けられる。駄菓子屋は、その発生の仕方から、2種類に分けられる。1つが、経営する側がはじめから自分の店を駄菓子屋と認識して始めた店。もう1つが、顧客である子供が経営者の意思とは無関係に、勝手にその店を駄菓子屋と認識した店である。後者は、日用雑貨やほかの商品を扱う傍ら、菓子やおもちゃを扱っていた店で、店名に「○○ふとん屋」「○○八百屋」などと表記された看板を掲げている店が多い。事実、私達がインタビューを行った「みずほ防災」も、後者の例である。しかし、子供達からすると、たとえ看板がどうあれ、自分達が好む菓子やおもちゃが置いてあり、なおかつ自分達にとって居心地がよく好ましい店だと、そこは自分達の店だと理解したのである。すなわち、店の経営者の意図とは無関係に、子供達は勝手にそうした店を駄菓子屋として認知したのである。よって、子供達の意味や認識が駄菓子屋を誕生させたといえる⁽³²⁾。

このことにより、『駄菓子屋的要素』をもつ空間は、子供達の意味や認識しだいで、いたるところに発生する可能性を持つと考えられる。

そしてこの『駄菓子屋的要素』を含んだ高齢者と子供の新たな人間関係を形成する場として、例えば高齢者の社交場と、児童館の融合を提案する。また、地域に雇用された高齢者が小学校や公園など子供の集まる場所に車などを移動手段として定期的に訪問し、駄菓子屋的な空間、時間を提供する。『ナメの人間関係』を築くためにはその訪問の頻度は高いほうがよりよいと思われる。地域の協力で高齢者が昔ながらの遊びを子供に伝えたり、ものづくりの体験をさせたり、一緒に昆虫を取りにいったり、大人の働く姿を見学したりする機会を

設ける。それにより『ナナメの人間関係』を築きながら、「生きた社会的学び」をする機会を子供達に与え、そこから人間関係が深まり、さらに広まることを期待するというものである。子供の身近にいる第三者の大人が、子供と同じ空間で、子供を教育の対象ではなく、社会の一員として、ふれあいのあるコミュニケーションをとるのである。

新たな空間を作り出すということで、地域の協力も必要となってくる。そして、こうした働きかけを地域から発信することで、地域のコミュニティーも活性化されることが狙いである。

最後に、本稿を作成するにあたって快くインタビューを引き受けて下さった方々、ご協力して下さった方々に深く感謝の意を示したい。

【注】

(1) 読賣新聞 2 0 0 4 年 6 月 2 日の記事より。

(2) 刑罰法令に触れる行為をした 1 4 歳未満の少年をいう。 少年法第 3 条
第 1 項第 2 号

(3) 読賣新聞 2 0 0 4 年 6 月 2 日の記事より。

(4) 厚生白書 (平成 1 0 年版)

http://www.hakusho.mhlw.go.jp/mhw/book/hpaz199801/hpaz199801_2_014.html

(5) 加藤理著『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』青弓社 , 2 0 0 0 年 3
5 頁より。

(6) 同上書 3 6 頁より。

(7) 飛躍的な経済成長を遂げた 1 9 5 5 年 (昭和 3 0) ごろから , 1 9 7 0
年代中ごろまでの約 2 0 年間のこと。

(8) 厚生白書 (平成 1 0 年版)

http://www.hakusho.mhlw.go.jp/mhw/book/hpaz199801/hpaz199801_2_014.html

(9) 専業主婦数は 1 9 5 5 年約 1 1 2 0 万人、 1 9 7 0 ・ 8 0 年約 1 2 6 0

万人、1990年1080万人、2000年1000万人である。「2001年度国民生活白書」より。

(10) 1973年の第二次ベビーブームを境に出生率は毎年低下し、2003年度の出生率は1.29で過去最低となった。厚生労働省統計情報部『人口動態統計』より。

(11) 0から12歳の子供を持ち、子育てに不安や悩みを持っている親を対象にした調査で、子育て上の悩みを聞いたところ、40.7%の親が「受験や進学問題」と答え、また子供にとって家事と勉強では、どちらかといえば勉強ができることが大切だと思うと答えた親は52.6%であった。日本女子社会教育会「家庭教育に関する国際比較調査報告書」より。

(12) 1992年度2学期からの第2土曜日の休み、1995年度1学期からの第2, 4土曜日の休み、全ての2002年度1学期からの全ての土曜日の休みになる。

(13) 塾に通っている子供の比率は、85年から93年の間に、中学生では4.5%から59.5%へ、小学生では16.5%から23.6%へと高まっている。特に、小学生についてみると、低学年を含めて塾通いをする子供が増えており、例えば、小学一年生では85年から93年の間に6.2%から12.1%へと増加している。また、親の60%以上が有名校に入るために子供を塾に通わせている。「国民生活白書」平成10年度版

(14) 車社会のことで、自家用車の普及・大衆化を示す。

(15) 運輸省自動車局「自動車保有車両数表」より。

(16) 「携帯電磁波レポート」より。

<http://ktai-denjiha.boj.jp/>

(17) インターネット普及率は88.1%である。「平成15年通信利用者動向」より。

(18) 調査者の主観により調査の目的を達成するために母集団を代表すると

思われる対象を任意に選ぶ。 名簿がなくても抽出が容易、 目的に
かなった対象者から情報が得られる、 母集団代表性がチェックでき
ず、一般化が困難。

(1 9) そもそも駄菓子屋の原型は、江戸の路地裏のような細い道の「辻」(道
が交差する地点) にあり、大人の日用雑貨と子供の日用雑貨を兼ねた
店である「辻みせ」という「万屋」にあるが、現在において、辻にあ
る万屋は「コンビニ」であろうことから、考える。

(2 0) 松田道雄『駄菓子屋楽校』222頁より。

(2 1) 松尾直子『学校づくりの仲間募集』を参考。

(2 2) 松田道雄『駄菓子屋楽校』222頁より。

(2 3) 文化人類学ではこのような関係を「冗談関係」といい、そのような人
を「社会的オジ」「モノンクル(ぼくのおじさん)」という。 松田
道雄『駄菓子屋楽校』 167頁より。

(2 4) 「クローズアップ現代」(2004年1月20日放送) より。

(2 5) 中央教育審議会 今後における教育の在り方

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/960701c.htm

(2 6) 「まちづくりをめぐる動きについて」 (大阪市立大学生生活科学部助教
授 檜谷美恵子) 参照

<http://www.mmjp.or.jp/scswo/kiroku4.htm>

(2 7) 松田道雄『駄菓子屋楽校』303頁より。

(2 8) 遊び場の減少による空間的な居場所の減少と、親や先生からのプレッ
シャーによって自分自身を出すことができない精神的な居場所の減少
の2つを指す。

(2 9) 厚生白書 (昭和54年版)

http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/mhw/book/hpaz197901/hpaz197901_2_032.html

(3 0) 平成8年 (1996年) 発表の旧厚生省老人保健福祉局「心豊かで活
力ある長寿社会作りに関する懇談会」中間報告においても、「一定の年

齢による画一的な捉え方は現実的ではなく、今後は個人個人が多様な生き方や考え方を持ち、身体的・精神的・経済的にも幅のある集団として捉えていく必要がある。そのためには、高齢者自身がより主体的・積極的に社会とのかかわりを求め、地域や社会で活躍するよう意識を変革するとともに、社会の側も画一的な高齢者観を変える必要がある・・・高齢者にあっては、『第二の現役世代』として、より自由な立場を生かして、さまざまな形で社会的に活躍することが求められる」より。

(3 1) フランチャイズとは、事業者(「フランチャイザー」と呼ぶ)が他の事業者(「フランチャイジー」と呼ぶ)との間に契約を結び、自己の商標、サービスマーク、トレード・ネームその他の営業の象徴となる標識、および経営のノウハウを用いて、同一のイメージのもとに商品の販売その他の事業を行う権利を与え、一方、フランチャイジーはその見返りとして一定の対価を支払い、事業に必要な資金を投下してフランチャイザーの指導および援助のもとに事業を行う両者の継続的関係をいう。 社団法人 日本フランチャイズチェーン協会より。

<http://jfa.jfa-fc.or.jp/second.html>

成功例として、駄菓子屋を経営する株式会社夢やの、フランチャイズチェーン店 8 2 店舗、直営店 3 2 店舗での展開がある(2 0 0 2 年、4 月末)。資本金 1 3 0 百万、売上高 3 0 0 5 百万(2 0 0 1 年、7 月決算)

(3 2) 松田道雄『駄菓子屋楽校』4 2 頁より。

【参考文献】

- ・ 青木正美著『東京下町覚え書き 昭和の子ども遊びと暮らし』本邦書籍、1990
- ・ あしたの日本を創る協会編『ハンドブック子どものための地域づくり』晶文

社、1989

- ・ 東洋著『日本のしつけと教育』東京大学出版会、2000
- ・ 飯島吉春著『子供の民俗学』新曜社、1991
- ・ 石橋幸著『駄菓子のおふろ』未来社、1961
- ・ 江森一郎『「勉強」時代の幕開け』平凡社、1990
- ・ 小田光雄著『＜郊外＞の誕生と死』青弓社、1997
- ・ かこさとし、永田栄一著『日本の子どもの遊び 鬼遊び』青木書店、1986
- ・ 加太こうじ著『下町で遊んだ頃』教育研究社、1979
- ・ 加藤理『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』青弓社、2000
- ・ 門脇厚司著『子どもの社会力』岩波新書、1999
- ・ 上笠一郎著『日本子育て物語』筑摩書房、1991
- ・ 子どもの遊びと街研究会編『三世代遊び場図鑑』風土社、1983
- ・ 斉藤孝著『子どもたちはなぜキレるのか』筑摩書房、1999
- ・ 佐藤一子著『子供が育つ地域社会 学校五日制と大人・子どもの共同』東京大学出版会
- ・ 清水義弘著『子どものしつけと学校生活』東京大学出版会、1989
- ・ 末本誠、松田武雄編『生涯学習と地域教育』春風社、2004
- ・ 住区内街路研究会著『人と車「おりあい」の道づくり』鹿島出版会、1998
- ・ 仙田満著『子どもとあそび』岩波新書、1995
- ・ 高橋勝著『子どもの自己形成空間』川島書店、1996
- ・ 田中治彦著『子ども、若者の居場所の構想「教育」から「関わり」の場へ』学陽書房、2001
- ・ 中川剛著『町内会』中公新書、1980
- ・ 中根千枝著『タテ社会の人間関係』講談社現代新書、1992
- ・ 野本三吉著『子ども観の戦後史』現代書館、1999
- ・ 萩野矢慶記著『街から消えた子どもの遊び』大修館書店、1994
- ・ 深谷昌志、深谷和子著『遊びと勉強』中公新書、1977
- ・ 藤田英典著『子ども・学校・社会』東京大学出版会、1996

- ・ 藤本浩之輔著『子どもの遊び空間』NHK ブックス、1990
- ・ 本田和子著『変貌する子ども世界』中公新書、1999
- ・ 松田道雄著『駄菓子屋楽校 - 小さな店の大きな話・子供が開く未来学』新評論、2002
- ・ 諸富祥彦著『子供よりも親が怖い カウンセラーが聞いた教師の本音』青春出版社、2002
- ・ 山崎正和著『柔らかい個人主義の誕生』中公文庫、1999
- ・ 脇田はる著『駄菓子屋日記』新日本出版社、1995
- ・ Émile Durkheim, *Education and Sociology*, 1922
- ・ Caillois Roger, *Les jeux et les hommes*, 1958
- ・ Marcel Mauss, *Essai sur le don in : L'Annee Sociologique* 1923-1924